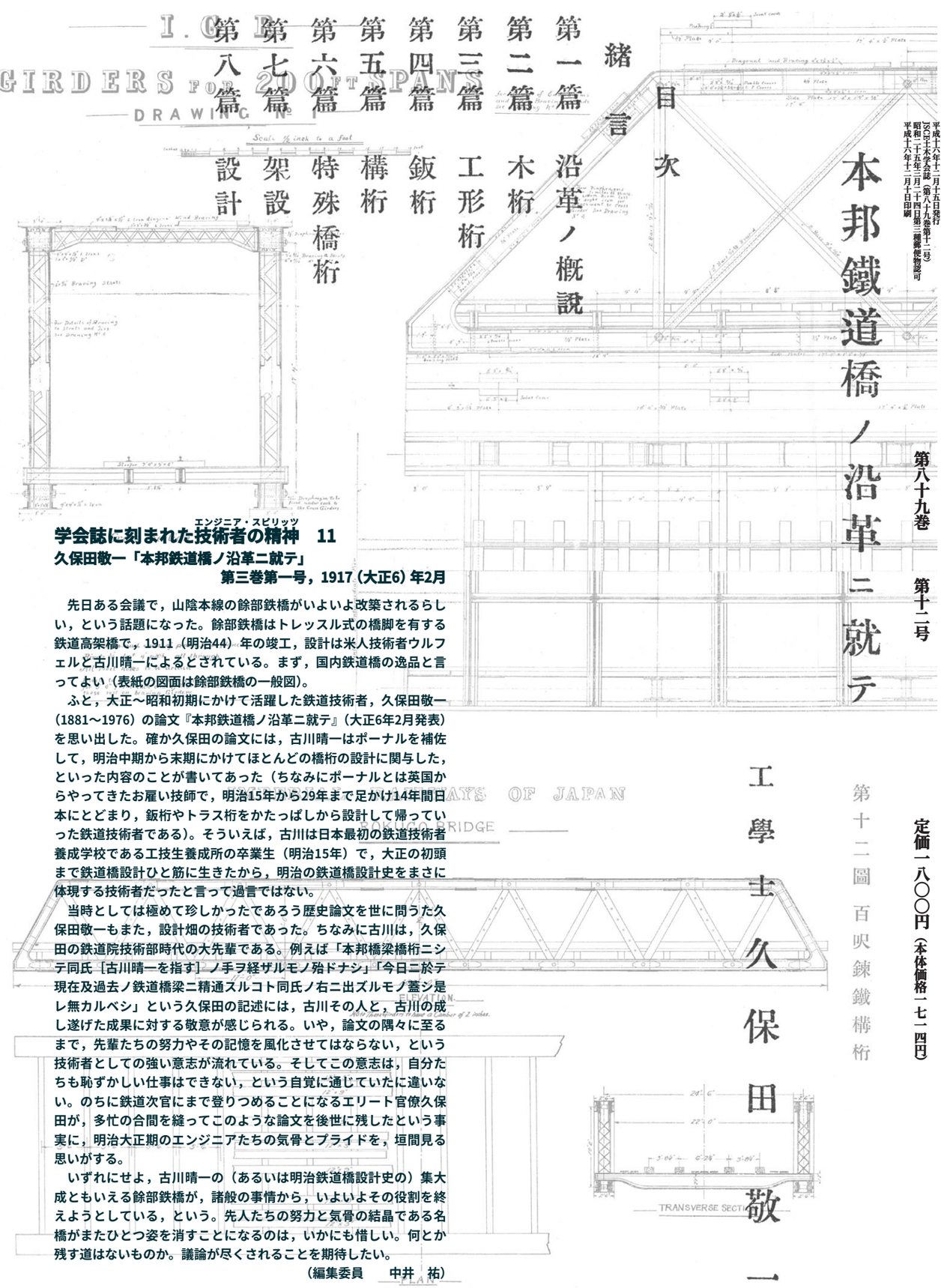

目次

緒言
第一篇　沿革ノ概説
第二篇　木桁
第三篇　工形桁
第四篇　鈑桁
第五篇　構桁
第六篇　特殊橋桁
第七篇　架設
第八篇　設計

本邦鐵道橋ノ沿革ニ就テ

工學士　久保田敬一

第十二圖　百呎鍊鐵構桁

第八十九巻　第十二号
定価一八〇〇円（本体価格一七一四円）

平成十六年十二月十五日発行
[2C]土木学会誌（第八十九巻第十二号）
昭和二十五年三月二十四日第三種郵便物認可
平成十六年十二月十日印刷

学会誌に刻まれた技術者の精神（エンジニア・スピリッツ）　11

久保田敬一「本邦鉄道橋ノ沿革ニ就テ」

第三巻第一号，1917（大正6）年2月

先日ある会議で，山陰本線の餘部鉄橋がいよいよ改築されるらしい，という話題になった。餘部鉄橋はトレッスル式の橋脚を有する鉄道高架橋で，1911（明治44）年の竣工，設計は米人技術者ウルフェルと古川晴一によるとされている。まず，国内鉄道橋の逸品と言ってよい（表紙の図面は餘部鉄橋の一般図）。

ふと，大正～昭和初期にかけて活躍した鉄道技術者，久保田敬一（1881～1976）の論文『本邦鉄道橋ノ沿革ニ就テ』（大正6年2月発表）を思い出した。確か久保田の論文には，古川晴一はポーナルを補佐して，明治中期から末期にかけてほとんどの橋桁の設計に関与した，といった内容のことが書いてあった（ちなみにポーナルとは英国からやってきたお雇い技師で，明治15年から29年まで足かけ14年間日本にとどまり，鈑桁やトラス桁をかたっぱしから設計して帰っていった鉄道技術者である）。そういえば，古川は日本最初の鉄道技術者養成学校である工技生養成所の卒業生（明治15年）で，大正の初頭まで鉄道橋設計ひと筋に生きたから，明治の鉄道橋設計史をまさに体現する技術者だったと言って過言ではない。

当時としては極めて珍しかったであろう歴史論文を世に問うた久保田敬一もまた，設計畑の技術者であった。ちなみに古川は，久保田の鉄道院技術部時代の大先輩である。例えば「本邦橋梁橋桁ニシテ同氏［古川晴一を指す］ノ手ヲ経ザルモノ殆ドナシ」「今日ニ於テ現在及過去ノ鉄道橋梁ニ精通スルコト同氏ノ右ニ出ズルモノ蓋シ是レ無カルベシ」という久保田の記述には，古川その人と，古川の成し遂げた成果に対する敬意が感じられる。いや，論文の隅々に至るまで，先輩たちの努力やその記憶を風化させてはならない，という技術者としての強い意志が流れている。そしてこの意志は，自分たちも恥ずかしい仕事はできない，という自覚に通じていたに違いない。のちに鉄道次官にまで登りつめることになるエリート官僚久保田が，多忙の合間を縫ってこのような論文を後世に残したという事実に，明治大正期のエンジニアたちの気骨とプライドを，垣間見る思いがする。

いずれにせよ，古川晴一の（あるいは明治鉄道橋設計史の）集大成ともいえる餘部鉄橋が，諸般の事情から，いよいよその役割を終えようとしている，という。先人たちの努力と気骨の結晶である名橋がまたひとつ姿を消すことになるのは，いかにも惜しい。何とか残す道はないものか。議論が尽くされることを期待したい。

（編集委員　中井　祐）

土木學會誌　12　December 2004　特集 エコマテリアル　環境を材料から考える　Vol. 89

第十五圖　餘部橋梁全般圖

平成16年12月15日発行（毎月1回15日発行）
土木学会誌第89巻第12号
昭和25年3月24日第三種郵便物認可
平成16年12月10日印刷・ISSN 0021-468X

土木學會誌

第八十九巻第十二号

特集／エコマテリアル
環境を材料から考える

論説　エコマテリアルとは　51
第1章　建設分野のエコマテリアル
第2章　エコマテリアルを支える関連規準
第3章　最新のエコマテリアル
第4章　エコマテリアルの本質を考える
第5章　エコマテリアルの経済性
第5章　エコマテリアル普及のために

［事故・災害］ミニ特集
災害多発
日本列島を襲う気候変動による災害　3　31

Vol.89
December
2004
12
Civil Engineering
http://www.jsce.or.jp/journal/